

端末価格高騰時代ならではの 新ビジネス

携帯電話中古販売店の動向

07年度より本格的に導入された新販売制度に伴う端末価格の上昇と景気悪化の影響で、端末市場は不調が続いている。08年度の携帯電話端末販売台数は前年度比26%減の3,765万台と、00年度以降過去最低を記録した(データ3)。このような市場環境の中、安価で端末を手に入れられる「中古端末」に注目が集まっている。使用中の端末が破損したときの緊急用のほか、使い分け用などとしても利用され始めている。また中古端末は資源の3R(リユース、リデュース、リサイクル)のリユースにあたるものであり、エコの観点からも注目度が高い。本稿では中古携帯電話端末市場の動向について、新品端末の販売をメイン事業に据えながら中古販売も行う日本テレホンと吉田通信に話を聞いた。

特集

P.3

データ

P.9

トレンド

P.11

経営

P.19

■ 中古端末ならではの利用法も登場

日本テレホン(株)

同社の主力事業は、新品端末を扱う携帯電話の販売代理店業務。関東、関西にあわせて20店舗を展開する直営の総合情報通信ショップ「イーブーム」のほか、ドコモやソフトバンクなどのキャリアショップ事業も行い、関東、関西を中心に合計で34店舗を持つ。

同社が中古携帯ビジネスに目をつけたのは、今から6年前の2003年。同社が当時吉祥寺で行っていた、「レンタルBOX」という貸し付けサービスに、社員の個人的に不要になった端末を置いて販売してみたところ、予想以上に好評を得たという。当時はまだ販売奨励金による販売モデルが全盛で、市場に出回っている新品端末の販売価格も安かったが、思っていた以上の反響に「これはビジネスになると感じた」と担当者は当時を振り返る。

■ 販売は好調で、端末の調達課題

中古端末の販売は非常に好調で、現在では月1千台程度を販売しているという。中古ビジネスでは何より「商品(端末)の調達」が肝であるが、現在は需要に供給が追いつかない状態で、買い取りに特に力を入れている。買い取りは同社イーブーム全店のほか、大手家電量販店のベスト電器、さくらやとも提携し、全国の店舗で実施している。

売れ筋は2年程度前の端末で、販売価格1万円~2万円のもの。例えば今、ドコモで新品の端末を購入しようとするれば、安いものでも機種変更で4万円以上はするので、中古でよいという割り切りさえできれば、非常に得な買い物といえるだろう。中古端末を実際に手にとってみたユーザーからは「思ったよりも綺麗、使える」と好評のようだ。人が直接触れて使用するものなので、同社では大阪にある専

門のセンターで滅菌処理などクリーニングを入念に行っている。また個人情報の塊ともいえる携帯電話だけに、データの消去も同様に、店頭と大阪センターで厳重に行っている。

その他、端末買い取り時に注意している点として、不正に入手された端末の存在がある。同社では新品未使用の端末を同時に買い取る際には、入手経路の確認、キャリアへの確認などを行い、不正端末の中古市場への流入を防いでいる。

同社の店舗は関東、関西の都市部に集中しているが、中古端末はいずれの店舗でも好評という。基本的には関東だと学生が多い街などで若者に売れるなどのケースが多いというが、関西では一般の商店街などにある店舗で老若男女に幅広く好調という。また、今年4月より開始したネット販売(イーブーム <http://www.e-boom.com/>)では特に販売数が伸びており、全国から毎日多数の申込みが入っているという。

■ 気軽に二台目として使えることで利用シーンも多様化

中古端末の購入動機は、端末破損時の「緊急用」などがまず挙がる。「ちょっとした事故で端末を壊してしまったが、新しく買うには数万円かかる。しかし携帯電話は片時も手放すことができない」。そんなときに、安価な中古端末を緊急避難的に買い求めるユーザーが多いという。

その他特徴的なのが、「これから水辺のレジャーに行くので、そのときのために追加で防水端末を購入する」、「海外旅行(出張)時に海外対応端末を購入する」という買い方。携帯電話をもう一回線契約して本格的に二台購入するほどではないが、ちょっとしたシーンで使い分けたいという時、安価に本体だけ購入できる中古端末が重宝されているという。「SIMカードを入れ替えれば端末を使い分けられる」

